



No.29

Jun.2008



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
<http://www.nabunken.go.jp/>

漢魏洛陽城における日中共同調査

去る2008年3月13日に日中共同調査の調印式がおこなわれました。中国社会科学院考古研究所と共同で実施する漢魏洛陽城の調査研究の協定です。

漢魏洛陽城は現在の中国河南省洛陽市に位置する都城遺跡で、後漢、魏、西晋、北魏の4王朝の都として栄えたところです。研究所では数年前からこの遺跡の共同発掘調査を計画し、中国側と協議を重ねてきました。このたび中国政府の許可をうけて、両研究所の間で日中共同調査の協議書の調印式をおこなうこととなりました。

調印式では本研究所の田辺征夫所長と中国社会科学院考古研究所の王巍所長がそれぞれ署名し、協議書を取り交わしました。調印式終了後には記者会見をおこない、この調査の意義を強調しました。

この共同調査では、4年間の計画で、漢魏洛陽城の中枢部である宮城を中心に発掘調査を進めていく予定です。本調査の目的は日中都城の比較研究にあり、日本古代都城の源流となる漢魏洛陽城の具体的な状況を把握し、比較研究の基礎資料を提示しながら

研究を進展させることを目指しています。

本年の発掘調査は4月中旬から開始しています。春は宮城南門北側の試掘調査を実施し、秋には本調査をおこなう予定です。

研究所と中国社会科学院考古研究所との間にはこれまでにも20年來の共同調査研究の実績があります。1991年にはじまった漢魏洛陽城永寧寺、1996年からの漢長安城桂宮、2001年からは唐長安城大明宮太液池の発掘調査をおこなってきました。この成果によって都城研究は大いに進展しています。

洛陽城は太極殿を正殿とした宮城を構成し、周囲に基盤目の条坊を展開した本格的な都城であり、中国の都城史においても画期となる遺跡です。また、洛陽城を基礎として発展した隋唐長安城は東アジアの周辺諸国における都城の形成にも大きな影響を与えています。この意味で、洛陽城は東アジアの都城史上もっとも重要な遺跡であり、その発掘調査は日中双方の研究者が注目する事業でもあります。

今後調査が滞りなく進展するよう日中双方で協力し、よりよい成果が得られるよう努力していきたいと考えています。
(都城発掘調査部 今井見樹)



固く握手をかわす王巍所長(右)と田辺所長(奈良文化財研究所にて)

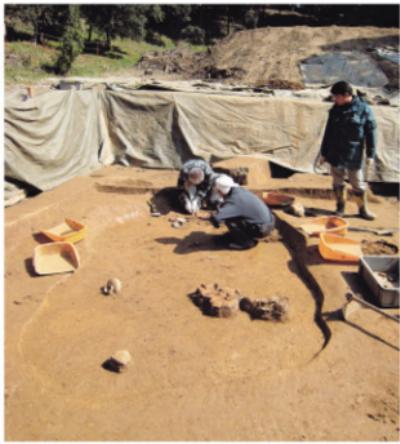
発掘調査の概要

甘樺丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第151次）

昨年11月から続いた甘樺丘東麓遺跡の調査は、4月末に埋め戻しを終了しました。今回の調査では新たに3棟の建物を確認するとともに、これまで見つかった建物も含めて年代を明らかにすることができました。

建物群は大きく2時期に区分できます。古い建物群は3棟あり、7世紀の中頃までに取り壊されることが明らかになりました。年代の手がかりとなったのは、調査区の北東隅で見つけた長さ4mほどの土坑（ゴミ捨て穴）です。この土坑は昨年の調査で確認した掘立柱建物の柱穴を壊しています。土坑からは7世紀中頃の土器がまとまって出土したため、まさに大化の改新の頃に建物が廃絶していることが判明しました。発掘調査で掘立柱建物の廃絶年代を明らかにすることは至難の業ですから、極めて幸運なケースといえるでしょう。

これまで、甘樺丘東麓遺跡は『日本書紀』に記された蘇我氏の邸宅ではないかと推測されてきました。今回の調査成果によって、その可能性は高まったといえます。しかし、建物群を蘇我氏の邸宅の一部と断定するには早すぎます。今回見つかった建物の内容を見ると、倉庫らしき総柱建物が2棟と小規模な掘立柱建物が1棟です。蘇我氏の邸宅ならば、屋根に庇がつくような大型建物が存在するはずです。ま



土坑の掘り下げ

だ谷の敷地6,000m²のうち2,000m²を調査したに過ぎませんから、残りの部分に大型建物があるのではないかと期待しています。

また、7世紀中頃に一旦は建物群が廃絶した後、さらに敷地を造成して新たな掘立柱建物を建てています。これらの建物は3棟あり、周囲に掘立柱跡を巡らせています。7世紀後半には谷を仕切って計画的に土地利用をおこなった様子が明らかになりました。7世紀後半の建物群は、誰がどのような目的で利用したものなのかな。新たな検討課題が生じました。

3月29日には現地見学会を実施し、2,000名を超える方が見学に訪れました。秋にはさらに調査を進める予定です。ご期待ください。

（都城発掘調査部 豊島直博）



現地見学会の様子



第151次調査区全景(南西から)

平城宮跡東方官衙地区の調査（平城第429次）

平城宮の東区朝堂院と東院の間には奈良時代の中央省庁である官衙が南北に並んでいたと考えられています。この場所を東方官衙地区とよんでいます。2006年度から数年にわたって調査する計画をたて、今回はその第2回目となります。調査は2008年1月11日より開始し、2008年5月7日に終了しました。調査区は南北と東西にそれぞれ90m、130mの長い区画を設定し、発掘総面積は約1,300m²になります。途中3月30日には現地説明会をおこない、あいにくの雨でしたが約500名の方に来訪いただきました。

発掘調査の結果、東西調査区のほぼ中央に平城宮内の排水を流す基幹排水路が南北に通り、これをはさんで2つの官衙区画が東西に配置されていることがあきらかになりました。便宜上、東側の区画を東区画、西側の区画を西区画とします。

基幹排水路は調査区の東端でもみつかっています。いずれも幅4m弱の南北方向の溝で、水の流れによる溝岸の浸食を防ぐために、木杭を列状に打ちこんでいました。また、南北調査区の南端には東西方向の溝が確認されました。

官衙の東区画は平城宮廃絶後の水田造成により、当時の地面が大きく削平され、区画や建物の存在をしめす遺構の状態はよくありませんでした。しかし、南北にながれる2本の基幹排水路と調査区南端の東西溝の位置から、東区画はこの3本の排水路に囲まれた内側に存在していたと推測できます。

東区画内にはいくつかの建物がみつかり、いずれも掘立柱建物で、少なくとも1回以上の建て替えがあることがわかりました。主なものでは、南北9間の南北棟建物や南北7間、東西2間の南北棟総柱の建物などがあります。東区画の南半部分では2つの土坑がみつかり大量の遺物が出土しました。

西区画は東区画と同様、区画施設の築地塀そのものは残っていませんでしたが、築地塀の存在をしめす雨落溝を確認したので、区画の東西幅は51mほどになります。西区画内には同じ規模、同じ構造の2棟の建物が東西に並んで検出されました。東西5間、南北2間以上の東西棟で総柱の礎石建物です。高床式の倉庫であろうと推測しています。礎石据付穴の一部には礎石や根石が残存しており、建物の東西両脇では雨水をあつめる溝を検出しました。

この礎石建物の周辺には同様の倉庫が複数集中しているとみられ、平城宮内での位置や平安京の建物配置などを参考にすると、國家の米倉であった可能性が高いと推測しています。

今回の調査では土器、墨書き器、瓦、木製品、木簡などが多く出土しました。瓦は東区画の南北棟建物付近、西区画の建物の雨落溝に集中しており、東区画の土坑からは花文鬼瓦、木製品、木簡などが出土しました。土坑の木簡は770年前後の近衛府、兵衛府に関わる削屑などが1,000点以上出土しており、今後の整理と解読が期待されます。

（都城発掘調査部 今井晃樹）



東西調査区（西から）



南北調査区（北から）

平城京でみつかった新羅の土器

新羅からはるばる海をこえてやってきた土器が、平城京の発掘でごくたまにみつかります。大多数は、日本の須恵器によく似た青灰色の硬い焼きの土器（陶質土器）です。新羅の土器には、このほか、緑色のうわぐすりをかけた、やや軟らかい焼きの土器（緑釉土器）があります。平城京でみつかった新羅の緑釉土器は、いまのところ1点だけです。新羅土器には表面をいろいろなスタンプ文で飾るのが特色です。文様で飾ることがほとんどない奈良の都の土器とくらべると大変にぎやかな土器です。

(企画調整部 千田剛道)



陶質土器：壺の口から頸にかけてのかけら。口の下の頸に当たる部分に「回」状のスタンプ文がめぐります。平城宮内裏東外郭を流れる基幹排水路から出土。



陶質土器：壺の肩の部分。櫛の歯を横にずらしながらつけた文様のあいだに、ぶどうの房がたれさがったようなスタンプ文が飾られています。平城京左京九条三坊の宅地から出土。



緑釉土器：壺の肩の部分。四弁の花文様や、紡錘形をしたスタンプ文をならべています。白っぽい地肌に濃い緑色の釉をかけて焼いています。平城宮東院石組溝から出土。

左ページ：実寸大



新羅の土器：にぎやかなスタンプ文で飾られています。

ベトナム・ドゥオンラム村集落 保存協力

やや時期を逸した感もありますが、今回はベトナム・ドゥオンラム村における集落保存への協力について報告します。文化遺産部建造物研究室では、ベトナム国ハタイ省ドゥオンラム村における集落保存に協力してきました。協力は、文化庁・奈良文化財研究所・昭和女子大学の3者が共同しておこなってきました。

平成15年度から17年度には、現地で保存のための基礎的な調査をおこないました。夏の調査では、暴力的な炎天下での調査となりましたが、建造物スタッフの若さでそれを乗り切りました。調査内容だけでなく、勤勉に調査をおこなう私達の姿勢がベトナムの人たちに高く評価されたことが、何よりの成果でした。調査の際には、調査を分担したベトナム側研究者との意見交換や、地元住民への調査成果の説明を頻繁におこないました。そして、そのなかで、保存の範囲、保存のシステム、保存のルール（規制）等について議論してきました。なお、調査成果は『ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書』（2007年3月刊行）にまとめています。

そして平成17年11月には、ドゥオンラム村はベトナム国家文化財に指定されるとともに、保存の範囲が決定され、平成18年5月には、保存のための臨時条例が発布されました。じつは、ベトナムの文化財遺産法では、保存のためのマスタープラン（全体の長期的事業計画）が策定されて、はじめて条例が正式条例になります。今、そのマスタープラン作成の最終段階にあります。

平成19年度からは、マスタープランに先行して、個別の建造物の修復が始まりました。それに対応するため、平成19年度からは、修復技術者の育成に対する協力を開始しました。平成19年度は、文化庁、

奈良文化財研究所、昭和女子大学の協力のもと、財ユネスコ・アジア文化センターの個人研修事業として、ベトナムから3名の技術者を日本へ招聘し、1ヶ月にわたって研修をおこないました。また、昭和女子大学のマネージメントのもと、日本の修復技術者がボランティアで、現地の修復現場の指導にあたっています。さらには、今年の2月からJICAから、修復担当と観光開発担当の2名の協力隊員が現地に駐在し、協力の輪が少しづつ広がってきています。

今回の協力事業では、地元が主体的に保存方策を策定し、保存事業をおこない、日本側がそのサポートをするというスタンスに徹しました。日本側からも、さまざまな提案をおこないましたが、「絶対にこうすべき」という押しつけるような発言は避けるように注意しました。また、ベトナム側と意見交換をした上で、最終的にベトナム側が判断したことに対するは、否定的な発言は避けるようにしました。その結果、現在ではベトナム側は日本側に対して、「お金」ではなく「技術や智恵」を期待するという関係を築くことができました。

ベトナムと長くお付き合いをして驚くのは、何よりベトナムの方々の勤勉さと処理能力の高さです。すべてがこちらの想定通りに動くわけではありませんが、それは日本国内においても同様です。ベトナムでは、議論して是と判断されたことに対するは、きわめて正確かつ迅速にものごとが進みます。この、真面目で勤勉な感性は、日本人に近いものがあり、海外のなかでも最も気持ちよく仕事ができる国のひとつと云えます。

皆様も、ベトナムにお越しの際には、是非ともドゥオンラム村に立ち寄ってください。多くの人たちが、ドゥオンラム村を見に来ることが、地元の方々の何よりの励みになります。よろしくお願ひします。
(都城発掘調査部 島田敏男)



日越合同調査隊記念撮影



地元行政担当者との保存方策検討風景

胡桃館遺跡出土の建築部材調査

秋田県北秋田市に所在する胡桃館遺跡は、1967～69年にかけて、3次にわたる発掘調査がおこなわれました。その結果、4棟の建物と2条の掘立柱構列などの下部1.5mほどが、立ったまま出土するという、日本の発掘調査史上、例のない遺構が発見されたのです。これらは火山学の研究成果から、915年に起きた十和田火山（現在の十和田湖を噴出口とする火山）の噴火による土石流で埋もれてしまったと考えられ、埋没建物と呼んでいます。建物の扉板には経を誦んだ墨書きがあり、これまで部分的にしかわからなかった墨書きが、赤外線カメラなどを駆使した2004年の奈文研の調査で、さらに釈読できるようになりました。また、当時刊行された発掘調査の報告書には建築部材の詳細な図面がありませんでした。このような背景から、2007年度には、保管されている部材について、墨書きの有無を確認する調査、建築技法を知るための実測調査、建物の建立年代を知るために年輪年代の調査などをおこないました。

調査の結果、新たな墨書き資料は発見されず、また年輪年代の調査からは、900年頃に伐採された杉の木を用いていたことがわかりました。ここでは多大な時間と労力を費やした部材の調査について述べてみたいと思います。

発見された4棟の建物のうち2棟は、地面に長い

角材を置いて（この部材を土居と称しています）、その上に板を組み上げる板校倉という構造の建物です。土居は長いものは13mにおよび（写真参照）、日本の発掘調査で出土したなかでは、もっとも長い建築部材でしょう。これを現地のみなさんの手を借りて収蔵庫から搬出し、各種の調査と写真撮影をおこないました。1棟の建物の土居4本を出し入れするだけでも、一日がかりです。

また部材をよく見ると、いろいろな痕跡が残されています。大きく分けると、部材を製作するときの痕跡と、建物を使用したときの痕跡に分けられます。

部材を製作するときの痕跡は、表面をチョウナで削った跡、そこをヤリガンナで仕上げた跡、板をノコギリで切った跡、穴をノミで穿った跡などがありました。残り具合のよい部材からは、使った道具の刃幅もわかります。刃こぼれしてしまった道具で削った痕跡もありました。

建物を使用したときの痕跡で驚いたのは、建物の扉の軸を受ける水平材に、扉を開閉させた際に擦れた同心円状の痕跡がはっきりと残っていたことでした。扉は180°開く構造ですが、135°ほどのところがやや凹んでおり、通常はそれほど開けていなかったらしいこともあります。

部材の調査によって、当時のこの地方の人が用いた建築技術とともに、建物を造り、使った人びとの息づかいも垣間みえたような感覚になりました。

（都城発掘調査部 箱崎和久）



収蔵庫から搬出した長大な建物の部材

飛鳥資料館夏期企画展のご紹介

「飛鳥 古寺巡礼」

平成20年8月1日（金）～8月31日（日）

（月曜日は休館、8月15日（金）は無料開館日）

今夏、当館では、飛鳥の古寺の「いま」を撮影した美しい写真と、発掘調査の成果をとおして古寺巡礼をお楽しみいただく展示を開催します。

現在、飛鳥には京都や奈良のような巨大な堂塔が建ち並ぶ大寺院はみられません。かつてこの地に建てられた寺々は、壮麗な伽藍を地中に秘めつつ、四季折々の景色のうつろいとともに、私たちに往時の歴史を偲ばせます。

飛鳥の地は、日本で最初に仏教が公式に伝えられ、花開いた場所です。崇峻元年（588）に飛鳥寺が建立され、その後も皇族や有力な豪族による寺院の造営が相次ぎました。『日本書紀』によれば、680年には京内に24の寺があったといいます。堅牢な瓦葺の屋根、高くそびえる塔、青丹に彩られた堂…最先端の建築様式による壮麗な伽藍が、飛鳥に建ち並んでいたのです。

都が飛鳥の地を離れた後も、寺々は法灯を守り伝えました。しかし、天災や争乱などでかつての壮麗な伽藍は失われて、地中に埋もれていきました。これらの寺院跡では、昭和31年の飛鳥寺の発掘以来、現在も発掘調査が続けられています。このような、地道な調査の結果、伽藍配置や建築技術、寺宝の数々などが明らかとなっていました。

夏の一日、飛鳥資料館の企画展を御覧いただき、古寺の風景にかつての伽藍の姿を思い重ねながら、古寺巡礼のひとときをお過ごしください。

（飛鳥資料館 西田紀子）



飛鳥寺発掘調査風景

■記録

埋蔵文化財担当者研修

○保存科学I（無機質遺物）課程

平成20年5月13日～21日 6名

○保存科学II（有機質遺物）課程

平成20年5月21日～29日 9名

○掘立柱建物・礎石建物遺構調査課程

平成20年6月9日～13日 13名

現地見学会・現地説明会

○飛鳥藤原第151次調査（甘樺丘東麓遺跡）

平成20年3月29日（土）2,100名

○平城第429次調査（東方官衙地区）

平成20年3月30日（日）453名

○平城第431次（第一次大極殿院南面回廊）

平成20年6月7日（土）807名

藤原宮跡資料室展示

○速報展「藤原宮大極殿院南門出土土地鎮具」

平成20年3月18日（火）～4月18日（金）

飛鳥資料館 春期特別展

○「キトラ古墳壁画十二支－子・丑・寅－」

平成20年4月18日（金）～6月22日（日）

*キトラ古墳壁画「十二支」特別公開

平成20年5月9日（金）～25日（日）

平城宮跡資料館展示

○速報展「平城宮跡東院地区中枢部の調査」

平成20年4月22日（火）～5月25日（日）

木簡ひろば

2008年3月5日本簡に関する総合情報サイト
「木簡ひろば」を開設しました。

<http://hiroba.nabunken.go.jp/index.html>

平城宮跡歴史文化講座（第5回）

（NPO平城宮跡サポートネットワークと共に開催）

平成20年5月18日（日）午後1時30分～

於：平城宮跡資料館講堂

「飛鳥から藤原・平城京へ」

寺崎保広 奈良大学教授

最近の本一 Personenの著作から

○松井章『動物考古学－Fundamentals of

Zooarchaeology in Japan－』

京都大学学術出版会、2008年3月

○井上和人『日本古代都城制の研究－藤原京・平

城京の史的意義－』

吉川弘文館、2008年4月

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2008年6月